

2010 年サッカーW杯南アフリカ大会の現地報告® —マンデラの野望とスポーツの可能性—

黒 井 克 行*

1. はじめに

2004 年 5 月 15 日。

南アフリカ共和国（以下、南アフリカ）にとって歴史的な一日となった。スイス・チューリッヒで行われた FIFA（国際サッカー連盟）の国際会議において、南アフリカは 2010 年に開催される第 19 回サッカーワールドカップ（以下、W 杯）⁽¹⁾ のアフリカ大陸初となるホスト国に決定したのだ。

「I feel like a youngman of 15」

ネルソン・マンデラ前大統領は開催国を決定する会議の行方を待ちきれず、発表の報に直に接しようとチューリッヒまで駆けつけ、そしてブラッター FIFA 会長から開催決定の発表を受けるや、その喜びをこの言葉で表した。歓喜に湧く南アフリカ関係者と笑顔のマンデラ氏を取めた写真にこの言葉が添えられたパネルがケープタウンのグリーンポイント・スタジアム⁽³⁾に飾られている。

私は大会開催前年のスタジアム建設現場を視察中、まるで建設作業員の労働の励みでもあるかのようにすでにこの写真が現場に掲げられているのを目撃したが、それはマンデラ氏の活動記録の中の一葉という位置づけでは片づけられぬ、多くの国民の、とりわけ黒人の喜びを代弁する南アフリカにとって永久保存版となることを信じて疑わなかった。

というのは、それが当時の同国が世界に向けて「アパルトヘイト」という忌むべき過去と訣別して⁽⁴⁾久しくも、あらためて国際社会の仲間入りが認められるか否かを世界に問う決意が込められているものとして捉えることができたからだ。

つまり、ホスト国としてW杯を無事に成功に導くことができるかどうかは今後、南アフリカが国家として世界の国々と名実共に共存共栄できるかの試金石であり、それは言い換えれば同国が半世紀近くにわたって国際社会からの孤立を余儀なくされた不名誉から完全に脱却できるチャンスでもあり、大きな賭けであった。いわば、W杯に同国の命運が託されたといっても過言でない。

マンデラ氏のW杯の自国開催に寄せる喜びに隠されていたものは一体何だったのか？

アフリカ大陸初のW杯開催の意義、またW杯は南アフリカに一体何をもたらしたのか？

オリンピックと並び称される世界最大のスポーツイベントであり、ビッグビジネスであるW杯に世界三百億もの人が熱狂するといわれるが、私はスポーツに秘められた力、及びその可能性を見極めるためにW杯南アフリカ大会開催を挟んで5回に及ぶ同国への取材渡航（2009 年 FIFA コンフェデレーションズカップ、2010 年W杯南アフリカ大会を含む）を敢行し、実際に自分の足と目でその証言者たらんと買って出た。

2. W杯の魔力と効果

2002年、アジア初という触れ込みで日韓共同開催でW杯が行われたが、サッカー後進国の日本⁽⁵⁾で迎えたそれは日本人の想像をはるかに超えるビッグイベントであり、大会に伴うさまざまな貴重な経験をさせてもらったことを今でも生々しく記憶している。

たとえば、象徴的なことは観戦チケット争奪戦とその相場である。人気アイドルグループやミュージシャンのコンサート、スポーツのビッグマッチ、たとえばトヨタカップ（現 FIFA クラブワールドカップ）や若貴ブームで活況を呈したバブル期の大相撲の観戦チケットなどは法外な値段⁽⁶⁾でインターネットやエージェントを通して売買されてきたが、W杯日韓共同開催におけるそれも常軌を逸していた。もちろん、正規のチケットは適正価格で予約売買されてはいたものの、そもそもが入手困難を極めるチケットであり、危うくも水面下での取引が常態化し、日本代表やヨーロッパの強豪国の人気のカードの価格は言い値の青天井にまで跳ね上がり、俗にいうところのプラチナどころか“ダイヤモンド”のそれとして扱われていたのである。すでに予選リーグ敗退が決まっている国同士の対戦ですらも正規価格の10倍にまで高騰し、買い手の中にはそれでも需給のバランスと「W杯の試合を生で観戦できる」喜びに目隠しされたまま、たとえアンダーグラウンドでの散財も厭わぬ者も少なくなかった。さらに「どこかにチケットはないか」と、インターネットでの呼び掛けやオークションの活用、また大会関係者とおぼしき各方面に声をかけまくり、予算に糸目もつけずに高額チケットを求めるといなりふり構わぬ“チケット狂騒曲”ともいうべき状況が横行し、異常な相場ができあがっていたのである。すでに日本のバブル経済は崩壊し、“失われた20年”の真っ只中にあったというのにだ。

日本は1998年の第16回フランス大会に悲願の初出場を果すまでサッカーファン以外はW杯への関心はお世辞にも高いとはいえず、むしろその存在すらも認識しない人が少なくなかった。つまり、対岸の火事ぐらいにしか思っていなかったW杯が、いざわが国の出場が現実となるや態度は豹変するのだ。ただ、その前段階として1993年のJリーグ発足と「ドーハの悲劇」⁽⁷⁾があるのだが、日本人がフランス大会で世界のサッカーの現実をメディアを通して積極的に知らされるにいたり、サッカーへの関心は驚くほどの高まりを見せ、2002年は日本の歴史上、“第2の黒船来襲～スポーツ編”ともいうべき怖いもの見たさと大きな期待を持って受け入れた結果、その魅力を思い知らされ、国境を超えてまで世界を熱狂させるスポーツの可能性を教えられたのである。W杯の魔力であり、それがチケットの異常な高騰を引き起したことで半ば説明がつくはずだ。

これはW杯は4年に一度開催されるという稀少性、32の出場枠を巡って予選参加国が196にも及ぶ地球的規模（南アフリカ大会の場合、6カ国協議には参加しない北朝鮮も勇んで参加する）、勝った負けたで殺人事件も起こる熱狂ぶり⁽⁸⁾等がその背景にあり、世界の競技人口の観点から見ても推定で野球の3千5百万人（国際野球連盟発表）に対してサッカーは2億7千万人（FIFA発表）と圧倒しており、それに比例してサポーターやファンがついてまわり、相応のビジネスマーケットも一部地域に限った野球に対してサッカーは世界隈なく200カ国余にも及ぶわけで、サッカー先進国に限らず開催能力を有する経済大国が開催招致に過熱するもっともな理由である。

いざ開催決定となれば、大会に向けてのインフラ整備及びそれにまつわる国内雇用の創出や観光産業の促進による経済的効果も生み出し、国内におけるサッカーのさらなる普及と発展成長だけではなく教育文化事業への波及効果も見込まれ、また開催実績が国力の国際的評価となり、国威発揚

へともつながっていく。特に南アフリカのような新興国にとってこのような効果が期待できることはまさに望むところであり、特にアパルトヘイトによる経済制裁や国際的孤立を強いられたこと、さらにオリンピックを始めとするスポーツ競技の国際大会への参加も拒否され続けてきたことでこれまで計り知れない経済的文化的損失を被ってきた同国にとってW杯は打ち出の小槌ともいえるべき魔力を持ち、恩恵が期待されることになるのであった。

ただ、南アフリカがこれまでの開催国並びに今後、開催を目論む他国と同様のことをW杯に求めているかという点、必ずしもそうとは限らない。南アフリカの特種事情を鑑みて調査する必要がある。まず南アフリカが期待するW杯効果は経済的文化的恩恵を被ることは当然のことながら、治安の改善と国際社会からの信頼回復を勝ち取ることに大きな意義があった。そして、アパルトヘイトによって生じてしまった人口の大多数を占める黒人の厭世観と喪失感の払拭と新たな自信の創出をW杯を境に実現できることが、2004年5月15日に見せたマンデラ氏の笑顔の奥に秘められた希望である。

FIFAのスローガンは「Fair play」であるが、他、2006年ドイツ大会以来、訴え続けられている公式メッセージがある。

「Say to no racism」

政治性を多分に含むメッセージであり、スポーツと政治との関係をとやかく言われるところではあるが、ブラッター会長は事あるごとに反人種差別を訴え、また世界の一流プレーヤーたちも異なる人種民族が集い戦うピッチ上でこのメッセージをもう一つのルールとして受け入れようとしてきた。⁽⁹⁾南アフリカは過去の施策とはいえ、人種差別政策を現実に行ってきた国であり、その国でW杯が開催されることの意味は深い。FIFAが過去を不問にしたとしても、「Say to no racism」のメッセージを発信する地として南アフリカを選択したことは大きな冒険であり挑戦であった。

確かに1995年に開催国としてラグビーW杯を成功させた実績はあったが、サッカーのそれとはあらゆる面で規模が違い過ぎ、そのまま「サッカーも」と言うにはあまりに短絡的過ぎる。実際、無事に開催することができるのかと大会前も大会中も常に治安への不安はつきまとい続け、そもそも開催前に代替国の準備もされていなかった⁽¹¹⁾のだから、FIFAにとってはまさに大きなリスクを背負っての挑戦であった。だからこそ、「アフリカ大陸初」という話題だけではなく、これまでにFIFAが経験したことのない不測の事態の発生と危険への取り組み、そして実際の管理運営に大きな意義を見出すことができるのである。

南アフリカ、FIFAの双方にとって失敗の許されない大会が2010年だった。

2010年、南アフリカは予選を戦い勝ち抜くことなく無条件で大会に出場できる開催国のアドバンテージを持つが、世界が注目する中、同国の期待を一身に背負ってピッチに立つ代表チームは「Bafana Bafana（バファナ バファナ）」という愛称で親しまれていた。公用語のズールー語で「少年たち」を意味する。

「I feel like a youngman of 15」

マンデラ氏のメッセージがあらためて思い起こされる。

3. 南アフリカのおもてなし

2013年9月8日、アルゼンチンのブエノスアイレスで行われたIOC（国際オリンピック委員会）

の会議で、日本が2020年の夏季オリンピック開催地に決定した。この時、日本のプレゼンターの一人、滝川クリステルの「お・も・て・な・し」のパフォーマンスが話題を呼び、投票権を持つIOC委員の心を少なからず動かしたであろうといわれる。その真偽はともあれ、この「おもてなし」、英語でいうところの「Hospitality」（以下、ホスピタリティ）はサッカーW杯の開催国にとっても大会の管理運営にあたって最も重要なアビリティであり、そもそも観光立国でもある南アフリカの得意とするところであり、開催準備にあたって同国が最も意識して取り組んでいたのが「ホスピタリティ」であり、同国のどこにいてもそれを実感させられた。

2009年5月、初めて南アフリカの地に降り立ち、ヨハネスブルグの空港で真っ先に私の目に飛び込んできたのが「2010 FIFA WORLD CUP SOUTH AFRICA」とプリントされたポスターに横断幕、看板、幟の類だった。これらは私を含む外国人へのごく軽いジャブ程度の最初のおもてなしの挨拶に過ぎなかった。1年後に控えるW杯開催の告知であるが、空港を出てからも、ケープタウン、ダーバン……どこの町へ行ってもそれは容赦なく街中に溢れ、すでに開催されているのではないかと錯覚さえ感じるほどであった。なかでも驚かされたのがパトカーだった。南アフリカ仕様の白と黄色のそれとわかるパトカーのボディに「FIFA 2010」とペインティングされている。治安の象徴であるはずのパトカーが“走る広告塔”と化してW杯開催キャンペーンに一役買っているのだ。後ろめたいところがなくとも、パトカーが走っているのを見ると緊張し、何事かとついつい目を奪われてしまいがちになるものだが、そこに広告されたものがあればこれはかなりの広告効果が望める。治安に問題を抱える南アフリカの犯罪予備軍らへの一種の警告的意味合いも込められた防犯広告でもあるのではないかと訝ったほどである。

“邪な考えを持っている者たちよ、全世界が注目するW杯期間中はおとなしくしていなさい。そしてこれを機に真面目に改心を”というメッセージをパトカーのボディから受け取る者がいたら、これは一石二鳥の広告効果であるが的外れか。いずれにせよ、官民一体となったデモンストレーションが国内中で派手に展開されていたのである。日本ならばこれはほとんど大手広告代理店だけに任せられ仕掛けられる広告ビジネスの一つなのだろうが、南アフリカではあくまでもホスピタリティの小手調べ程度でしかなく、開催1年前からすでに国民一人一人が同国の営業マンとしてさまざまな局面に自然な形で、ビジネスを度外視したホスピタリティを展開していたのである。

たとえば、国民の一人としてカウントはできないが、大会のマスコットキャラクターである。南アフリカの代表的動物であるレパードをイメージし、名前は「ザクミ」というマスコットキャラクターだが、「ザクミ」は南アフリカの土着言語であるコサ語で「いらっしゃい」を意味する。キャラクターの名前からしてホスピタリティを意識させ、開催ポスターと併せてこの愛くるしい「ザクミ」がいたるところで見受けられる。大会が終わる頃には「ザクミ」の人気は最高潮に達し、ぬいぐるみや関連グッズを入手することは“あるもの”と合せて非常に困難を極めた。

“あるもの”とはブブゼラである。これこそ、大会を通して南アフリカを世界中に重低音を持ってアピールした同国の魂であり、国際文化交流の最高のツールとして、おもてなしの号砲を鳴らしたのである。

4. ブブゼラは平和の進軍ラッパ

「ブウォーッ」

歓声なのか。それとも遠い国からの中継ゆえの混線による雑音なのか。南アフリカから日本へのW杯のテレビ中継に観戦者の誰もがこの音に耳を疑った。しかし、この耳慣れない重低音は結局、試合終了まで延々と続くことになる。大会が進むにつれてこの音はさらにヒートアップし、特に南アフリカ代表の試合ではスタジアムを支配してしまうほどだった。これが南アフリカのサッカーシーンにおいては必携の応援グッズであるブブゼラが放つ音源だ。実際、私は現場で否が応にも耳にさせられたが、“象の声”とも称されるそれは確かに動物の鳴き声に聞こえるが、決して心地いいものとは感じられない。後ろの席から伸びたブブゼラの音口が耳元でも鳴らされようものならば耳がつんざかれる思いで、これはもはや騒音公害以外の何物でもなかった。ところが慣れとは恐ろしいもので、散々聞かされ続けていると「ブウォーッ」が観戦のリズムとなり、もはやそこになくしてはならないものとまで錯覚し、また自分がもう一人のフィールドプレーヤーになった気持ちで客席にいながらに試合に参加している高揚感さえ覚えさせられていったのである。

何故なのか？

ブブゼラは南アフリカでは市中のスーパーマーケットでも山積み⁽¹²⁾となって売られている日用品みたいなものであるが、その由来を探ればこれは同国の歴史を語る上で欠かすことのできない文化そのものであることがわかった。同国最大の部族ズールー族は村人を集めるためにクドゥ（ウシ科）の角を鳴り物として利用した。また、これが出す大きな重低音が害獣のヒヒを遠避けるだけでなく“殺してしまう”との言い伝えもあり、彼らにとっては生活に欠かせぬ道具だったのだ。ちなみに、ブブゼラの「ブブ」はズールー語で「音を出す」という意味である。それがクドゥの角から1メートルに満たないプラスチック製のラッパ型に姿を変え、また活躍の場をサッカー場に変えるのである。とはいえ、ヒヒを遠ざけ“殺してしまう”という本質は変わらず、サッカー場でブブゼラを鳴らすサポーターの狙いは相手チームの選手を音で圧倒し、応援するチームのために援護射撃をするというものである。テレビ観戦でもあの重低音を感じられたであろうが、“殺される”とまではいかないうまでも生で聞かされた身としては五感を揺さぶられる迫力だったことを今でも耳が覚えて忘れることができない。

サポーターは第3のプレーヤーと言われるが、こうなるとブブゼラも立派なサポーターであり、まさに戦いの舞台に相応しい応援グッズで、歴史的背景からいっても南アフリカのサッカーシーンには欠かせぬ存在であることをあらためて教えられた。感覚的に「うるさい」と思うことに変わりはないが、そこには意図された“戦いの雄叫び”があり、南アフリカの魂という理由がそこにあるからだ。そのことは観戦に訪れた外国人サポーターにも伝播し、郷に入れば郷に従えとばかりに、気がつけばブブゼラは国境を越えて世界中のサポーターの試合観戦の通行手形になっていた。そして、W杯をスタジアムで楽しんだ外国人はかなりの割合でブブゼラをお土産というよりも観戦した記念の証拠品としてあらためて購入することになる。大方の各国サポーターは南アフリカのサポーター同様に赤、青、黄のお好みのブブゼラを実際にスタジアムでお国の代表への援護射撃とばかりに吹いて応援し、その姿は日に日に増えていった。結果、大会が終わりに近づく頃にはスーパーで山積み⁽¹²⁾にされていたブブゼラは底を尽きかけ、またヨハネスブルグの空港のW杯の特設ショップコーナーで帰国しなに「お土産にでも」と立ち寄ったところ、思わぬ売り切れ状態に手ぶらを余儀なくされた人も少なくなかったはずだ。すでに前回の南アフリカ渡航の際に何本かを入手していた私も、「さらにもう1本」と空港で買物を予定していたがその当てが外れたうちの一人だったからだ。

ここでことさらブブゼラが巻き起こしたW杯における南アフリカの特異な現象を語るのが本来の狙いではない。ブブゼラが南アフリカの魂であるとまで言い切る理由は何かだ。

W杯開催前年の、前哨戦となる6大陸王者に開催国と招待国を加えた8カ国で争うコンフェデレーションズカップの取材に渡航した時のことである。この時すでに私はスタジアムでブブゼラの存在並びに重低音を経験し、早速、好奇心に任せて一本購入し試しに吹いている。が、これがなかなか南アフリカ人のように上手く音を出すことができず、恥ずかしながら出してもせいぜいオナラの不発音といったところだった。結局、大して上達を見ぬまま長さ80センチほどの嵩張るそれを手荷物として帰国の途についたのだが、空港で手荷物検査場を通過しようとした際、係員が私の手元のブブゼラを認めるや、黒い顔にニタッと白い歯を剥き出し、手荷物台のスーツケースそっちの

「(ブブゼラを) 吹いてみろ」

検査に引っかかったわけではないだろうが、言われるがままに吹くもあの象の鳴き声たる重低音を望むべくもなく相変わらず不発音を出すのが精一杯ながらも従って吹いた。まさか気の抜けた音に誘われたわけでもあるまいに、気がつくやう検査場の周りは“黒い”人ばかりとなっていた。アジアからの外国人が自分たち自慢のものを手にしているのが珍しくも苦闘している姿が面白くも映ったようで皆笑っている。

「ちょっと貸してみろ」

と係員が私からブブゼラを取り上げるや、「どうだ」といわんばかりにあのスタジアムで聞いた重低音を甦えらせ、それが空港中に響き渡った。居合わせた一同、拍手喝采の大騒ぎである。ブブゼラを返され、また

「吹いてみろ」

再チャレンジを促されたが、また不発音。今度は別の一人が取り上げ、またもや見事に“雄叫び”を奏でる。上手く吹けまいが余計なお世話で、あたかも自慢しこちらを笑い者にしようというのか。“被害者”の立場から言わせてもらえば、その場の雰囲気は決してそのような陰湿なものではなく、その音を通しての国際交流は明るいまでに盛り上がり、ブブゼラ一本で現地の多くの人たちと笑顔と笑い声と重低音、そして不発音だけで円滑なコミュニケーションをはかれたことは照れくさくも愉快的な思い出となった。

結局、手荷物の検査をしたんだかしなかったんだかほとんどフリーパスで、彼らの笑顔に見送られながら手荷物検査場を後にし搭乗待合室へと向った。治安上、緊張の欠かせぬ空港の手荷物検査場で行われることとは到底考えられぬ、ご法度に近い係員の所業ではあったが、これも彼らなりの愛嬌あふれるおもてなしだったと受け取った。

その後、私は南アフリカ内を散策する際、必ずブブゼラを携行することにした。すれ違うほとんどの人が笑顔で迎え入れてくれるのだ。外国人がそれを認めてくれているということへの彼らなりの敬意であるのではないか。こうなると、凶悪犯罪が横行するヨハネスブルグだが、一つの実験を思いついた。

「ブブゼラに優る防犯グッズはないのではないか」との仮説を立てての試みだ。

実際に、「危険地域」と外国人旅行者が近寄ることを警告されている黒人居住区を訪ねた際にもブブゼラを携行したのだが、私の仮説は的を得ていた(詳細は後述)。

ブブゼラが人種民族を超越した、彼らにとって宗教的意味合いまでも持つ魂だと認識させられた。

W杯を楽しんで南アフリカを後にしたアメリカ人が、米大リーグのスタジアムにブブゼラを持ち込み鳴らしたというニュースを聞いた。その内容は、そこでは（ブブゼラは）まったく受け入れられず、他の観客から重低音以上の大ブーイングを浴びせられ、以降、大リーグでは「ブブゼラ禁止令」が出されたという。

実は、W杯期間中、スタジアムで観戦する外国人の中にブブゼラの大きな音への苦情が絶えず起こっていた。選手たちにもピッチ上で選手間同士で掛け合う声がかき消されて意思の疎通を図れないとの不満も噴出し、ブブゼラ使用禁止の声が上がっていた。

しかし、ブラッター会長は「アフリカで開催されるW杯をヨーロッパ化すべきでない」と一蹴した。もし、ブブゼラを取り上げるような判断が下されていたらどうなっていたのだろうか。南アフリカの黒人からすれば自分たちの文化を否定された忤怩たる思いに苛まれたのは間違いないだろうが、かといって不満から行動に出るような事態を想像するのは杞憂に過ぎなかった。彼らにとってサッカー観戦の魂ともいべきブブゼラよりも、ホスピタリティの精神から海外のお客さんを優先させること、つまりは大会を成功させることの意義を知っているからだ。それが敬愛して止まないマンデラの意向であることを黒人たちの誰もが以心伝心で理解している。この報告の後半の部分でも重ねて触れるが、少なくとも、国際社会から同国が試されていることに対する彼らなりのプライドであると、自分は理解したい。

南アフリカのプロサッカーリーグで、日本のプロ野球の「巨人対阪神」戦にあたる「カイザーチーフス対オーランドパイレーツ」というライバル対決があるが、カイザーチーフスの黄色のブブゼラに対してオーランドパイレーツは白と黒のブブゼラでサポーターはそれぞれ統一され、この一戦ではスタジアムが二分される。まさに、ブブゼラは地元に根づいたスポーツ文化であり、大リーグでのスタジアムでの使用はともかく、南アフリカにおいては最大限に尊重されるべきものであることがわかる。それを国際舞台にまで持ち出して強要するものではない。空港で手取り足取りブブゼラの扱いを紐解いてくれたように、彼らにとっては平和の象徴でもあるからだ。

ただ、騒音といわれても確かにそれには違いなく、W杯期間中、対策としてブブゼラの売り上げに比例して外国人には耳栓が飛ぶように売れた。これも予め用意されていたホスピタリティである。おそらく、世界史上、最も耳栓が注目された期間だったことはいうまでもないだろう。

5. 白人はラグビー、黒人はサッカー

南アフリカは世界に名だたるスポーツ愛好国である。恵まれた自然や地形を活かした、たとえば大西洋とインド洋の2つの大洋に面していることからマリンスポーツは盛んであり、また地の利を活かした競技コースの設定が容易なことから自転車ロードレースやトライアスロンの国際大会も開かれる。ケープタウン辺りではふだんでもアスリートの走る姿やバイクを漕いで汗を流している光景に出会うことは珍しくない。特に、ラグビーやクリケットは世界屈指の実力を誇ることもあり国技として親しまれ人気は高いが、ただ競技者のほとんどは白人である。たとえば、ケープタウン⁽¹³⁾辺りで昼休みの過ごし方の一つとして、上半身裸でタッチフットボールを楽しんでいるのを見かけたが、そこに黒人の姿はなかった。そもそも、南アフリカでは「ラグビーは白人のスポーツ」と見なされ、国際試合で黒人は南アフリカではなく相手国を応援してきた。アパルトヘイトが完全撤廃さ

れて初めて出場が許され、しかも自国開催となった翌1995年のラグビーW杯における南アフリカ代表チーム30人の中に黒人は1人しか登録されていなかったのも一つの証である。

一方、「黒人はサッカー」という図式も成り立つ。1880年代にヨハネスブルグで金鉱が発見され、そこに集まってきた労働者の間でサッカーが盛んとなり、サッカーを中心とした一つのコミュニティが形成され、後に南アフリカを代表するプロサッカーチーム「オーランド・パイレーツ」の前身のクラブが作られた。オーランドは政府が強制的に黒人を移住させて出来上がった街の一つであり、1976年の反アパルトヘイト暴動で最大の黒人居住地区となったソウェトの一部として発展した。そうしてサッカーの聖地ともいうべき町が発展した経緯からもサッカーは黒人にとって純粋なスポーツとして楽しむだけでなく、彼らの存在に欠かせぬ拠り所とまで言い切っているかもしれない。サッカーは南アフリカの黒人のアイデンティティである。

この二つのスポーツを通した白人と黒人の対立構造はマンデラ氏をモデルとして描かれた映画『インビクタス／負けざる者たち』(2009)⁽¹⁴⁾でも端的に表現され、当時の様子の一部を垣間見ることができる。たとえば、アパルトヘイト撤廃前の象徴的なシーンとして、道を挟んで整備されたグラウンドで富裕層がラグビーに興じる一方、デコボコの土のグラウンドでは裸足の黒人がサッカーをしている。双方のグラウンドにはお互いの行き来を認めぬ柵が設けられているというものだ。

つまり、南アフリカにおけるラグビーとサッカーの国内における位置づけは、政治によってスポーツ本来があるべき人種民族の壁を超えて万人が楽しめるという本質から逸脱して存在せざるをえぬ不幸の歴史が生み出した結果だった。このことは白人黒人を問わず、スポーツマンシップの精神を持ち合わせている者たちからしたら不本意なことであり、この歴史は一刻も早く塗り替える必要があった。

マンデラ氏の思いはまさにここに端を発している。

1990年に27年間にも及ぶロベン島での監禁から解放され、1994年に大統領に就任したマンデラ氏は積年の理不尽や人種差別政策に一切の怨念を挟むことなく、翌年のラグビーW杯を人種問題解決への第一歩とすることを目論んだ。

アパルトヘイトによってそれまで参加が許されなかったラグビーW杯へ初めて出場できることは白人にとって喜び以外の何物でもないが、黒人にとっては対岸の火事かそれ以下でしかなかった。しかし、黒人からの圧倒的人気と支持を誇る英雄マンデラ氏は黒人らのそんな思いを知りながらも堂々と白人の誇りである同国代表チームのグリーンのジャージに身を包んでW杯の応援に回った。黒人からすればマンデラのやることとはいえ、面白いはずはない。実際、当時の黒人向けの新聞では大きく扱われてもおかしくないW杯ラグビーの記事はほとんど見当たらず、いつものサッカーで紙面は埋められていた。スタジアムへ同国を応援する黒人の姿もほとんど見られず、その一方で白人はアパルトヘイト時代の旧国旗を持ち出し、スタジアムで振って応援している。

大会のスローガンは「One Team, One Nation」だった。

マンデラ氏は国民が一丸となることを望んでいたことはグリーンのジャージを着たことからもうまでもない。彼は「一つのチームは一つの国」であることを身をもって示しながら行動し、白人と黒人の団結の象徴としてラグビーを捉えようと挑んだのである。このマンデラ氏の熱い思いとスポーツに本来秘められている理屈のいらぬ面白さ、国境も人種民族も問わず楽しめる特質は、同国が勝ち進んでいくにつれて様相が変わっていく。もちろん、マンデラ氏の意図が理解されていっ

たことが大きな理由の一つであるには違いないだろうが、明らかにスタジアムの様子が変わっていった。白人プレーヤーたちは、試合前の国歌斉唱でマンデラ政権誕生により新しく定められた黒人言語であるコーサ語とズールー語の国歌『ンコシ・シケレリ・アフリカ』（神よ、アフリカに祝福を）を歌う。スタジアムに黒人が応援する姿も増えていった。出来すぎた話だが、南アフリカは国際大会から遠ざかり試合勘も技術強化もままならなかったというのに優勝を果たした。これで国中が盛り上がるわけではない。あくまでも一時的なものに過ぎず、それで人種問題が解決するなどとはもちろん、マンデラ氏自身も思っていないはずだが、たとえそうであったにせよ、スポーツを通して肌の色に関わらずに国民が同じ方向を見て、国際的に優勝という評価を得た。国全体がそれまでになかった空気に包まれていたことに疑いはなかった。

そして、2010 年のサッカーW杯がある。

しかし、すでにマンデラ氏は 1999 年に政界を引退していた。

引き続き ANC 政権が国政を握り、豊かな鉱物資源や水産資源を背景にアフリカ大陸一の経済大国を誇ってはいたが、人種問題に端を発する貧富の格差を是正するには遠く及ばず、また国内の治安だけではなく、それを助長する隣接国からの不法移民の急増にも悩まされていた。

「果して南アフリカでサッカーW杯を開催できるのか？」

と疑問を投げかけられていた大きな理由の一つである。

ただ、すでに国家の要職から離れてはいたが、マンデラ氏にはサッカーW杯開催が 1995 年のラグビーに続いて南アフリカの新しい国づくりのさらなる第一歩に追い風となるだろうと考えていたのは想像に難くない。

6. 黒人の誇りとW杯の置き土産

南アフリカでは黒人が人口の 8 割を占める。

その彼らのアイデンティティであるサッカーの世界最高峰の大会＝W杯が 2010 年に祖国にやってくる。ラグビーではない今回は黒人たちの出番である。2002 年の“第二の黒船来襲”で湧いた日本をはるかに凌ぐ感動でその時を迎えることは、その前年に散々ブズエラのおもてなしを経験したことだけで容易に想像がつく。国としても当然のことながら国際社会の目を意識して大会の成功を目論むのは絶対であり、さもなければ未来がないくらいの覚悟であるはずだ。それが政界を引退したマンデラ氏からの意向を持って後進を託された政府の責任といていい。しかし、それ以上に人口の大多数を占める黒人は自分たちのアイデンティティであるサッカーで世界で恥をかくわけにはいかないのである。つまり、国が世界で試されるというよりも、彼らからしたらW杯自国開催はアパルトヘイトが撤廃されて本来あるべき人間としての権利を得たことに対して恥じないだけの姿勢を見せる大舞台であり、ホスピタリティの見せ所でもあるのだ。

すべての黒人がそうであるとはいわないが、少なくともスタジアム建設や道路工事等インフラ整備による国内雇用の創出、大会期間中は観戦観光目的で訪れる外国人が落していくことの恩恵に預ることも含めて、たとえ一時的にせよW杯効果を実感させられるはずであり、それで良しとすべきでもそれを最終目的とすべきでもない。そもそも黒人の矜持に触れてみたいというのが、この取材の過程の中で最も辿り着きたい先でもあった。

W杯開催中、黒人の真意、本音に接しようとブズエラ片手にソウエトの居酒屋へ出かけた。

やはり、ブブゼラ携行が彼らソウェトの黒人を呼び寄せるきっかけとなり、と同時に先の実検で実証済みの防犯効果があったのかもしれないが、緊張の中にも最終的には実に友好的なコミュニケーションを図ることができた。

「アナタたち外国人は我々タウンシップ（＝黒人居住区）で暮らす黒人を一体どう見ているんだ？泥棒か犯罪者ばかりだと思っているのか？」

いきなりだった。思うところを正直に答えた。

「はなから色眼鏡で見るとつもりはないが、評判はよくないし、危険だから近づかない方がいいと言われている。ただサッカーは好きな連中ということらしいから分かり合えると思い、ブブゼラもこうして持ってきたんだ」

やはり、ブブゼラ効果は甚大だった。警戒心を解いたようで、またもや「吹いてみな」だった。不発音を聞くや、それが大いにウケて最初の乾杯をした。その後入れ代わり立ち代わり店に居合わせた客が人懐っこく寄って来ては乾杯にブブゼラだ。この夜、一体何回乾杯し、何度不発を繰り返し、ハグを交わしたろうか？そして誰からもサッカーとマンデラ氏についての自慢話を聞かされた。今でも忘れない言葉がある。

「泥棒はここでは生きていくための仕事のひとつなんだ。だって気がつけば親は泥棒で、教育を受けていない者は親を真似することに何の疑問の持ちようもないじゃないか。それがマンデラとサッカーでちょっと考えが変わった。黒人でもマンデラは大統領になったし、サッカーは泥棒より面白いよ。上手くなりゃあお金になるんだろう」

アパルトヘイトが撤廃されたといっても、この政策の下で育った世代が被った後遺症の根は如何ともしがたいものがある。しかし、サッカーでもラグビーでもスポーツが人の心を動かす可能性を持ち、それはどんな言葉や政治よりも説得力があるのではないかと感じさせられた。

翌日、この地区にある比較的広い空き地に行く約束をさせられた。そこには十数人の子どもと三人のドイツ人がいた。三人はボランティアとしてここで子どもたちにサッカーを教えているという。タウンシップでのこのような光景はW杯後、増えているという。経済格差の是正に向けて等しく教育を施すことは南アフリカにとって大きな政治課題だが、スポーツの活用がそのための方策として、他のどんな教育にも勝るとも劣らないものに思えてならない。前日盃を交わした自称“泥棒”も子どもたちに混じってサッカーに興じていた。

「もう少し早くサッカーに出会ってたら少しはましな人生になっていたんだろうけどな」

スタジアムで実際に観戦したかどうかはわからぬが、自国開催のこの間、直にW杯の空気の中にいたこの子どもたちの中から将来、国を黒人社会を背負う選手が出ることを思わずにいらなかった。

2010年、南アフリカ大会は無事に終えた。

黒人の矜持が導いた結果であり、マンデラ氏のスポーツに賭けた思惑はほぼ外れることはなかったのではないかな。

ただ、この成功が治安の回復等、同国を劇的に変化させたわけではない。少なくとも国際社会に対して大会開催への不安を杞憂とさせたことは大きいし、同国からしてみれば、してやっつたりの思いだろう。そして、何よりも国民、とりわけ黒人のアイデンティティであるサッカーというアイテムで少なからずも大会をやり終えた開催国の一員としての自信と誇りを勝ち得たことが彼らにとっての最大の収穫だったはずだ。

2013 年 12 月 5 日、ネルソン・マンデラはヨハネスブルグの自宅で 95 歳の生涯を終えた。念願であったW杯の閉会式がマンデラ氏最後の公の場となった。

2013 年 12 月 10 日、その最後となったヨハネスブルグのサッカーシティスタジアムで追悼式典が行われた。日本の皇太子徳仁親王、オバマ米大統領をはじめとする歴代米大統領二人に世界の要人が弔問に参列するというこれまでに記憶にない超 VIP が勢揃いする盛大な式典となった。生前の故人の徳による以外のなにものでもない。

9 万人余りも収容する同スタジアムには他、しめやかな黒装束ではなく、派手な民族衣裳やW杯を思い起こさせる出立ちの南アフリカ国民がここかしこで本来の弔いとは思えぬ鳴り物入りやダンスなどで賑やかな盛り上がりを見せていた。これが我が英雄・マンデラが望む葬り方といわんばかりに。

マンデラ氏は同じ人間ながら肌の色だけで長い間垣根をつくってきた人種問題をスポーツに内包する力及びその可能性を信じ、しかもW杯という世界の大舞台のお膳立てをして南アフリカを世界に発信し、政治生命を全うした。彼のこの野望は難しい問題をさらに前進させる大きなヒントになったに違いない。

最後のお別れの舞台がW杯の開会式閉会式のスタジアムであることを遺言にしていたわけではないだろうが。

注

- (1) 1930 年第 1 回ウルグアイ大会から 1998 年第 16 回フランス大会まで、開催国は立候補国に対する FIFA 理事による投票で決定し、それまではほとんどヨーロッパと北南米大陸の間で交互に開催される結果となっていたが、FIFA のブラッター会長が「2010 年以降のW杯は各大陸持ち回りで開く」と大陸持ち回り制を提唱し、南アフリカ開催の道筋が作られた。しかし、2007 年の FIFA 理事会で開催国にも競争原理が必要と持ち回り制は廃止され、すでに決まっている 2014 年のブラジル大会以降、この制度にとらわれることはなくなった。
- (2) 2004 年 5 月 15 日、FIFA 理事会で理事 24 人による投票により、南アフリカ 14 票に対し、モロッコ 10 票、エジプト 0 票により南アフリカの開催が決定した。
- (3) 南アフリカはW杯開催に際し、新設 5、改築 5 の 9 都市 10 カ所にスタジアムの建設を準備した。ケープタウンのグリーンポイント・スタジアムは大西洋に面した新設で、準決勝の 1 試合が行われた。
- (4) 1948 年に法制化されたアパルトヘイトは、1994 年 4 月の全人種参加の総選挙で ANC（アフリカ民族会議）のネルソン・マンデラ氏が大統領に就任し、完全撤廃される。
- (5) 1929 年に日本は FIFA に加盟しているが、1993 年の J リーグが発足してプロ化されるまで、日本サッカーリーグというアマチュアでの活動が続き、1968 年のメキシコ五輪で銅メダルを獲得したものの、野球の人気には遠く及ばず、その間、アジアのライバル・韓国はすでにW杯出場を果し、北朝鮮にいたっては 1966 年イングランド大会でW杯史上最大の番狂わせでイタリアを破りベスト 8 入りする。J リーグ開幕以降、サッカーを取り巻く日本の環境は劇的に変化する。1930 年の第 1 回ウルグアイ大会から遅れること 68 年を経た 1998 年のフランス大会に初出場し、FIFA ランキングは現在 50 位（2014 年 2 月現在）。
- (6) バブル期の大相撲人気は若貴兄弟に加えて小錦、曙、武蔵丸といったハワイ力士の活躍もあり、会場は連日大入り満員御礼に湧き、升席（4 人分）は 30 万円余りで売買されることもあった。ちなみに、平成

25年度九月場所は税込みで4万5千2百円。また、サザンオールスターズの地元茅ヶ崎でのコンサートはインターネットで28万円の値が付いた。

- (7) 1993年10月28日、カタールのドーハで行われた98年のW杯アメリカ大会アジア地区最終予選の日本対イラク戦。この試合で勝てば日本のW杯初出場が決まるが、2対1の1点リードで迎えたロスタイムにイラクのコーナーキックから同点に追いつかれ、W杯出場は4年後まで持ち越された。「ドーハの悲劇」に対し、初出場を決めた時の試合を「ジョホールバルの歓喜」と言われる。
- (8) 1994年Wアメリカ大会に出場した南米コロンビアは圧倒的な強さで地区予選を突破して本大会では優勝候補にまで上げられた。しかし、予選1次リーグを敗退。その原因の1つがオウンゴールによる負けで、ゴールを献上してしまったアンドレス・エスコバル選手は帰国後、10数発の銃弾を受け射殺された。「エスコバルの悲劇」として記憶されている。
- (9) 2006年ドイツ大会決勝戦「フランス vs イタリア」でフランスのエース、ジネディーヌ・ジダンがマルコ・マテラッツィに頭突きをくらわせ一発退場処分を受けた。ジダンがアルジェリア移民2世であることの人種差別発言をマテラッツィがしたと言われるが、真相は明らかになっていない。ヨーロッパリーグではサポーターと選手の間での人種差別問題が少なくない。
- (10) 南アフリカはアパルトヘイトによりIRB（国際ラグビーボード）から除名され、第1回、第2回とも参加が許されなかったが、同政策の廃止を受けてIRBに復帰し、第3回大会で開催国に選ばれた。国際大会から遠ざかっていたこともあり、開催を不安視されたが、成功をおさめただけでなく、大方の予想を覆して当時最強を誇っていたニュージーランドを延長戦の末に下し、優勝を飾った。
- (11) 治安や会場までのアクセスへの不安を理由にした開催能力の問題から、前回開催国のドイツや前々回の日本が代替開催国の候補に上がっていた。
- (12) スーパーマーケットで日本円で200円ほどで売られている。空港でも南アフリカの土産物として同国の国旗をデザインしたものやら、世界各国のそれをあしらったものもあるが、場所柄、1500円の割高である。
- (13) ラグビーでは激しいタックルが競技の醍醐味の一つであるが、タッチフットの場合ボールを持っている相手にタックルして倒す代わりに両手で体にタッチすることでタックルとみなし、その時点でボールを離さなければならないルールの下行われる。より安全と、経験を問わずに楽しめることを目的とされている。
- (14) 2009年アメリカ映画。南アフリカのネルソン・マンデラ大統領（モーガン・フリーマン）と同国代表ラグビーチームの白人のキャプテン（マット・デーモン）がW杯制覇へ向け奮闘する姿をクリント・イーストウッド監督が描いた人間ドラマ。1994年、南アフリカ初の黒人大統領マンデラはアパルトヘイトによる人種差別や経済格差をなくし国をまとめるには95年に自国開催されるラグビーW杯での優勝が必要と感じキャプテンと連携する。
- (15) African National Congress。南アフリカ共和国の政党、アフリカ民族会議。マンデラは第11代議長で、現大統領のジェイコブ・ズマは第13代議長。
- (16) 2010年、W杯を目的に南アフリカを訪れた外国人の数は309,554人に上り、その内89%のツーリストが同国への再渡航を望み、96%が同国観光を奨める（南アフリカ観光局発表）。

参考文献

木崎伸也（2009）『2010 南アフリカW杯が危ない』角川S S新書

佐藤誠（1998）『南アフリカの政治経済学—ポスト・マンデラとグローバリゼーション』明石書店

峯陽一（1996）「南アフリカ『虹の国』への歩み」岩波新書

ティム・マッキー（2002）『未来を信じて 南アフリカからの声』小峰書店

平野克己（2009）『南アフリカの衝撃』日本経済新聞出版社

後藤建生（2010）『ワールドカップは誰のものか FIFA の戦略と政略』文春新書

Number 編集部（2010）『南アフリカW杯総集編完全保存版』文藝春秋

取材協力

南アフリカ観光局